ラオス・ナムトゥン２ダム現地訪問

（2011 年 3 月 16 日～19 日）

フォトレポート

メコン・ウォッチ

Mekong Watch

＜ナカイ高原の移転村＞

ナカイ村ヌア地区の補償農地に作られた灌漑用のタンク。農地の持ち主の住民によれば、農地に水を引くためのパイプが取り付けられておらず、使用できないという。今回聞き取り調査を行ったナカイ村およびポンサオン村では、灌漑設備を利用して、乾季の耕作を行っている住民は見受けられなかった。

貯水池の船着き場。同事業の生計回復プログラム（農業・漁業・林業・畜産・小規模ビジネス）のなかで、現在のところ、漁業が最も住民の収入に貢献している。しかし、一般的にダムの貯水池の魚は数年で減少する傾向にあり、実際に影響住民も、NT2 の貯水池でも魚が減っていると話す。漁業に依存した生計回復は持続的ではない。（ナカイ村ヌア地区）

移転前の村の水没を免れた森で野草とタケノコを採って来たという女性は、「バイクで森まで行き、3 時間かけて探したけど、これしか採れなかったの」と話した。「昔はもっと大きなタケノコがたくさん採れた」と言うが、そうした林産物を採取していた森の大部分は水没してしまった。（ナカイ村ヌア地区）

ある移転世帯の夕食。食卓に並んだのは、米もおかずもほぼ全て購入したものだった。家の主人は「魚が捕れた日は魚を食べるが、5 日のうち 2、3 日はおかずは村の商店で買っている」と話す。（ナカイ村ヌア地区）

150 万キープ（約 1 万 6 千円）で購入したという冷蔵庫に入っていたのは、ほとんど飲料水だけだった。持ち主は「みんな持っているから」と購入の理由を説明した。（ナカイ村ヌア地区）

家の軒下に積まれたローズウッド。現在、ローズウッドの違法伐採が、住民にとって最も大きな収入源になっている。時々逮捕者が出るというが、「（捕まったとしても）罰金を上回る稼ぎがある」と住民の一人は話した。生計回復プログラムが成果を上げられず収入源がないこと、主食を含む食料品や電化製品など現金収入の需要が高まっていること、道路が改善され買い付け業者がアクセスしやすくなったことなどが、移転住民をローズウッドの違法伐採に駆り立てている要因だと見られる。

事業の支援によって作られた村の市場。住民が村で作られた野菜や貯水池で捕った魚を販売する場所となることが想定されていたが、実際には、ほとんど使われることがなく、この日は、県庁所在地タケクから来た商人が臨時市場を開き、住民に商品を販売していた。（ポンサオン村ポンサワン地区）

＜セバンファイ川下流（マハサイ郡）＞

発電後の水が流されるセバンファイ川沿いの村では、ほとんど漁業ができなくなっている。2011 年２月頃までは週末は発電量が減らされていたが、現在は週末も放流が行われるようになったため、漁業ができる日がないという。魚の仲買人の女性は、「家で食べる分が捕れれば良い方。この１ヶ月は全く魚を買い付けていない」と話した。（パーナン村）

（上）2010 年 5 月のマハサイ村。商業運転は開始されていたが、漁業ができる日もあり、パーナン村から仲買人が魚を売りに来ていた。（下）2011 年 3 月同じ場所にて。かつて魚の売買でにぎわっていた船着き場から魚の仲買人の姿が消えていた。近くの商店主によれば、ここで魚の売買が行われることはなくなったという。

マハサイ村ガーン地区。村落生計回復基金を使って作られた養魚池。持ち主は、「200 万キープ（約 2 万円）を借りて養魚池を掘り、１年目は 80 万キープ（約 8 千円）の売り上げがあったが、２年目以降は水が溜まらず、使うことができない」といい、「まだ 153 万キープ（約１万６千円）の借金が残っている」。現在も、毎月 20,000 キープ（約 200 円）の利子は支払い続けているという。同村同地区では、8 世帯が養魚池を掘ったが、魚を売って収入を得ることに成功しているのは１世帯のみという。

マハサイ村ガーン地区の別の貯水池。持ち主の住民は「洪水で魚が流れ、全く収入がなかった」うえ、「幼児が落ちて亡くなったので、自費で埋め立てた」と話した。初期投資と合わせ約 700 万キープ（7 万 3 千円）の出費があったが、郡の職員に「返済できなければ、逮捕される」と言われたため、日雇い労働の賃金で 200 万キープの借入金を返済したという。